

千葉県八千代市

逆水遺跡 f 地点 北裏畑遺跡 b 地点 高津新田遺跡 c 地点

西山遺跡 b 地点 西山遺跡 c 地点 内野遺跡 b 地点

役山遺跡 a 地点 川崎山遺跡 k 地点

ヲサル山南遺跡 b 地点

－不特定遺跡発掘調査報告書V－

2008

八千代市教育委員会

千葉県八千代市

逆水遺跡 f 地点 北裏畑遺跡 b 地点 高津新田遺跡 c 地点

西山遺跡 b 地点 西山遺跡 c 地点 内野遺跡 b 地点

役山遺跡 a 地点 川崎山遺跡 k 地点

ヲサル山南遺跡 b 地点

－不特定遺跡発掘調査報告書V－



2008

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市教育委員会が平成17・18年度に実施した逆水遺跡f地点ほか8地点の発掘調査報告書である。
2. 調査遺跡の所在地、調査期間、調査面積、調査担当は下記のとおりである。

	遺 構 名	所 在 地	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因	調 査 担 当
1	逆水遺跡f地点	八千代市米本字逆水1218-1外	平成17年10月24日 ～ 平成17年11月9日	248㎡/1,874.6㎡	宅地造成	宮澤久史
2	北裏畑遺跡b地点	八千代市豊田町字北裏865-1外	平成17年11月2日 ～ 平成17年12月7日	500㎡/5,250㎡	宅地造成	森 竜哉
3	高津新田遺跡c地点	八千代市八千代台南2丁目5-1外	平成17年11月14日 ～ 平成17年12月27日	1,435㎡/2,684㎡	土地区画整理	宮澤久史
4	西山遺跡b地点	八千代市村上字宮山752番1外	平成17年12月7日 ～ 平成17年12月20日	180㎡/1,838㎡	倉庫及び店舗建設	森 竜哉
5	西山遺跡c地点	八千代市村上字宮山752番3外	平成17年12月10日 ～ 平成17年12月20日	48㎡/409.8㎡	倉庫及び店舗建設	森 竜哉
6	役山遺跡a地点	八千代市米本字島ヶ谷1125外	平成18年2月1日 ～ 平成18年2月13日	138㎡/1,631㎡	工場建設	宮澤久史
7	内野遺跡b地点	八千代市吉橋字内野1149番5	平成18年2月24日 ～ 平成18年3月7日	128㎡/1,179.8㎡	工場建設	宮澤久史
8	川崎山遺跡k地点	八千代市豊田町字川崎山742番1外	平成18年3月13日 ～ 平成18年3月24日	320㎡/2,339.5㎡	宅地造成	宮澤久史
9	ツサル山遺跡b地点	八千代市大和田新田字ツサル山587外	平成18年9月25日 ～ 平成18年10月30日	1,190㎡/13,300㎡	宅地造成	宮澤久史

3. 上記の確認調査は、八千代市教育委員会が不特定発掘調査事業として、千葉県県の県費補助金を受けて実施した。
4. 整理作業及び報告書作成作業は、ヲサル山南遺跡b地点を宮澤久史が、それ以外を伊藤弘一が担当し、平成19年10月29日から平成20年3月14日までの期間実施した。
5. 本書の執筆及び編集は、第1章、第2章9節を宮澤が、それ以外を伊藤が行った。縄文土器の観察については一部を除き玉井庸弘氏の協力を得た。
6. 西山遺跡については、b地点、c地点が隣接しているため、報告はb・c地点としてまとめて報告した。
7. 現地での遺構・遺物の写真撮影は宮澤が、室内の遺物の写真撮影は高屋麻里子が行った。
8. 本書の挿図の作成は伊藤弘一、内田武志、日向洋子、小弓場直子が行った。
9. 本書の挿図において使用した地図は以下の地図を基に作成している。
国土地理院発行 1/50,000地形図 [佐倉]
八千代市発行 1/2,500八千代市都市計画基本図No5、6、14、15、16、19、26、27
10. 本書の遺構番号は、発掘調査時のまま使用している。
11. 遺構・遺物の縮尺は下記のとおりである。
[遺構] 土坑 1/40 [遺物] 1/1、1/3、1/6
12. 出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。
13. 本書に使用したスクリーントーン表示は以下のとおりである。
■ 粘土
14. 発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。(順不同、敬称略)
千葉県教育委員会 八千代市立郷土博物館 村田一男 中野修秀 峰村 篤 玉井庸弘

目次

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 調査された遺跡	4
第1節 逆水遺跡f地点	4
第2節 北裏畑遺跡b地点	6
第3節 高津新田遺跡c地点	12
第4節 西山遺跡b・c地点	16
第5節 役山遺跡	18
第6節 内野遺跡b地点	20
第7節 川崎山遺跡k地点	22
第8節 ワサル山南遺跡b地点	24

図版

挿図目次

第1図 掲載遺跡位置図	2
第2図 逆水遺跡f地点周辺地形図	4
第3図 逆水遺跡f地点トレンチ配置図	5
第4図 北裏畑遺跡b地点周辺地形図	6
第5図 北裏畑遺跡b地点遺構図	7
第6図 北裏畑遺跡b地点遺構・遺物図	9
第7図 北裏畑・川崎山・上ノ山遺跡 陥し穴分布図	11
第8図 高津新田遺跡c地点周辺地形図	12
第9図 高津新田遺跡c地点トレンチ配置図	13
第10図 高津新田遺跡c地点遺構・遺物図	14
第11図 西山遺跡周辺地形図	16
第12図 西山遺跡b・c地点トレンチ配置図	17
第13図 役山遺跡周辺地形図	18
第14図 役山遺跡トレンチ配置図	19
第15図 内野遺跡b地点周辺地形図	20
第16図 内野遺跡b地点トレンチ配置図	21
第17図 川崎山遺跡k地点周辺地形図	22

第18図 川崎山遺跡k地点トレンチ配置図	23
第19図 ワサル山南遺跡b地点周辺地形図	24
第20図 ワサル山南遺跡b地点トレンチ配置図	25
第21図 ワサル山南遺跡b地点08P	26
第22図 ワサル山南遺跡b地点01P～07P	28
第23図 ワサル山南遺跡b地点出土遺物(1)	30
第24図 ワサル山南遺跡b地点出土遺物(2)	31
第25図 ワサル山南遺跡b地点出土遺物(3)	32

表目次

表1 逆水遺跡調査一覧	4
表2 ワサル山南遺跡b地点 遺物観察表(1)	30
表3 ワサル山南遺跡b地点 遺物観察表(2)	31
表4 ワサル山南遺跡b地点 遺物観察表(3)	32

図版目次

図版 1 逆水遺跡f地点	(1～4)
北裏畑遺跡b地点	(5～8)
図版 2 北裏畑遺跡b地点	(1～5)
図版 3 高津新田遺跡c地点	(1～7)
図版 4 高津新田遺跡c地点	(1)
西山遺跡b・c地点	(2～5)
役山遺跡a地点	(6～7)
図版 5 内野遺跡b地点	(1～4)
川崎山遺跡k地点	(5～8)
図版 6 ワサル山南遺跡b地点	(1～8)
図版 7 ワサル山南遺跡b地点	(1～5)
ワサル山南遺跡b地点	(1. 出土遺物)
図版 8 ワサル山南遺跡b地点	(2. 出土遺物)
図版 9 ワサル山南遺跡b地点	(3. 出土遺物)

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして開発が進み、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、その開発の傾向を強めている。また、都市計画法の改正による市街化調整区域の開発規制の緩和により、従来許可の制限された地域についても開発事業が進められている。こうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」と略す。）では千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者からの予定地内にかかる「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の事前手続き（以下、「照会」と略す。）により対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち発掘調査が必要と判断される事業について千葉県費補助金を受け、不特定遺跡発掘調査事業として調査を実施している。

以下は、平成17年度、18年度に発掘調査を実施した遺跡の調査に至る経緯である。

逆水遺跡 f 地点

平成17年9月、有限会社ティーズホーム 代表取締役 田上伸之氏から市内米本の宅地造成にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて市教委では現地踏査を行った。現況は山林で、遺物散布は確認できないものの、周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査で遺構が検出されていることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成17年9月、文化財保護法第93条第1項の規定による土木工事のための発掘届け（以下「土木工事の届」と略す。）が提出され、準備の整った10月24日に調査に着手した。

北裏畑遺跡 b 地点

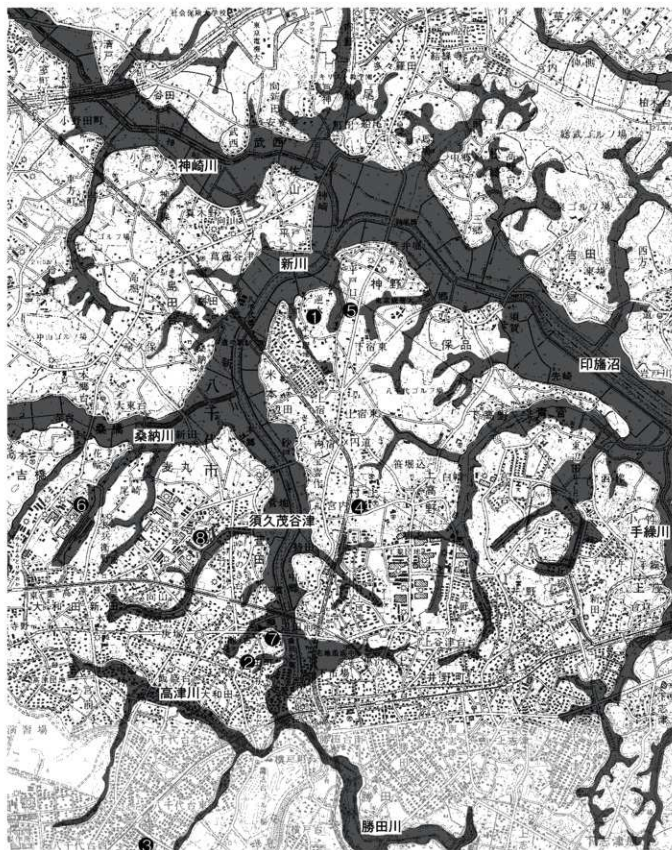
平成17年8月、株式会社国際総合設計 代表取締役 柳田正人氏から市内萱田町の宅地造成にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて市教委では現地踏査を行った。現況は山林で、近世遺物の散布を確認した。周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査でも近世遺物が出土遺物が出土していることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成17年10月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った11月2日に調査に着手した。

高津新田遺跡 c 地点

平成16年9月、八千代市八千代台二丁目土地区画整理事業 共同施工者 和田玉 和田幸世 和田雅敏 内田正勝氏から市内八千代台南地区の土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて市教委では現地踏査を行った。現況は畑地で、縄文土器及び近世遺物の散布が認められた。周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査で遺構が検出されていることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成17年11月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った11月24日に調査に着手した。

西山遺跡 b 地点

平成17年9月、加藤孝一氏から市内村上の店舗建設にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて、市教委では現地踏査を行った。現況は果樹園及び駐車場で、遺物散布は確認できないものの、周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査で遺構が検出されていることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確



1. 逆水遺跡 2. 北裏畑遺跡 3. 高津新田遺跡 4. 西山遺跡 5. 役山遺跡 6. 内野遺跡 7. 川崎山遺跡 8. マサル山南遺跡

S = 1/50,000

第1図 掲載遺跡位置図

認し、発掘調査を実施することになった。平成17年11月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った12月7日に調査に着手した。

西山遺跡 c 地点

平成17年11月、加藤孝一氏から市内村上の農業倉庫建設にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて市教委では現地踏査を行った。現況は果樹園で、遺物散布は確認できないものの、周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査で遺構が検出されていることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成17年11月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った12月20日に調査に着手した。

役山遺跡 a 地点

平成17年11月、中央木材株式会社 代表取締役 中村能央氏から市内米本の工場建設にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて、市教委では現地踏査を行った。現況は工場跡地で、遺物散布は確認できないものの、周知の遺跡の範囲内であることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成17年12月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った18年2月1日に調査に着手した。

内野遺跡 b 地点

平成18年1月、株式会社第一タイムリー 代表取締役 前島敏一氏から市内吉橋の工場建設にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて市教委では現地踏査を行った。現況は山林で、遺物散布は確認できないものの、周知の遺跡の範囲内であることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成18年2月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った18年2月24日に調査に着手した。

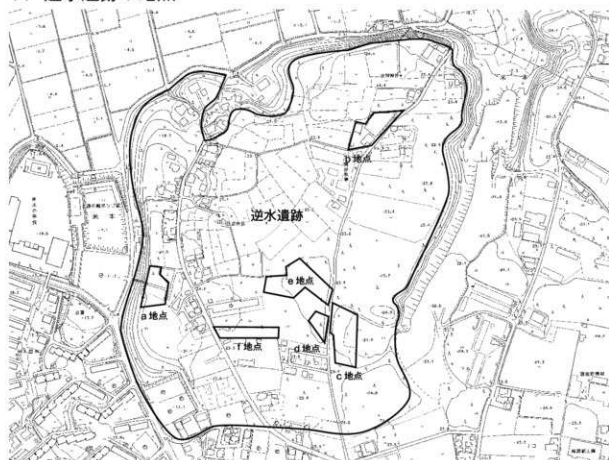
川崎山遺跡 k 地点

平成18年2月、協和不動産株式会社 代表取締役 宮本眞澄氏から市内萱田町の宅地造成にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて、市教委では現地踏査を行った。現況は山林で、遺物散布は確認できないものの、周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査で遺構が検出されていることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成18年2月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った3月13日に調査に着手した。

ヲサル山南遺跡 b 地点

平成18年6月、株式会社アットホームセンター 代表取締役 秋山二三男氏から市内大和田新田の宅地造成にかかる埋蔵文化財の照会文書が提出された。これを受けて市教委では現地踏査を行った。現況は畑地で、縄文土器等の遺物散布を確認し、周知の遺跡の範囲内であり、過去、周辺地区での調査で遺構が検出されていることから、遺跡が所在する旨、回答した。その後、取り扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初計画を進めたい旨確認し、発掘調査を実施することになった。平成17年7月、文化財保護法第93条第1項の規定による「土木工事の届」が提出され、準備の整った9月25日に調査に着手した。

1. 逆水遺跡 f 地点



第2図 逆水遺跡 f 地点位置図 (1:6000)

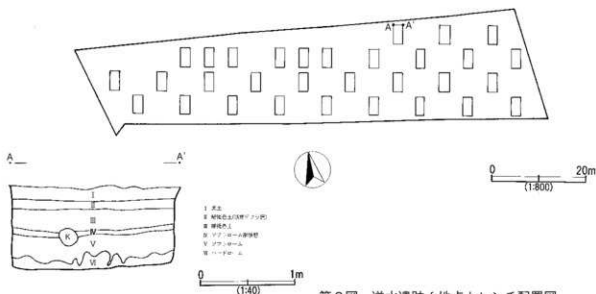
遺跡の立地と概要

逆水遺跡は、市城北東の米本地区北端部、八千代市をほぼ中央で分ける新川の蛇行する部分を北に臨み、北から入り込む東西の谷津に挟まれた舌状台地に位置する。標高は20～23mであり水田面との差は約18mであり台地平坦面に立地している。遺跡の南側には、縄文・弥生土器の出土した大山遺跡が所在する。本遺跡はこれまで5地点において調査が実施されている。

表1 川崎山遺跡調査一覧

地点名	遺構概要	遺物	文献
a	弥生後期竪穴住居跡4軒、同土坑1基、中近世墓坑19基 (本調査)	縄文土器(芽山・浮島・諸磯・阿玉台)、弥生土器(後期)、土師器(平安時代)、水薬通宝	八千代市市内遺跡発掘調査報告平成7年度
b	弥生中期方形周溝墓6基、時期不明溝1条、同土坑2基 (確認・本調査)	弥生土器(中期)	八千代市市内遺跡発掘調査報告平成8年度
c	弥生後期竪穴住居跡1軒 (確認調査)	弥生土器(後期)	八千代市市内遺跡発掘調査報告平成14年度
d	弥生後期竪穴住居跡2軒 (確認調査)	弥生土器(後期)	八千代市市内遺跡発掘調査報告平成15年度
e	縄文中・後期土坑10基、弥生時代後期竪穴住居跡1軒 (確認調査)	縄文土器(阿玉台・称名寺・堀之内・加曾利B)、弥生土器(後期)、寛永通宝	八千代市市内遺跡発掘調査報告平成18年度

今回のf地点の現状は、山林であり、a・e・d地点から約100m離れた台地基部中央平坦面に立地する。



第3図 逆水遺跡f地点トレンチ配置図

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて5m×5mの方眼を設定し、その区画をもとに2m×4mのトレンチを10m間隔で設定し遺構確認を行った。

調査期間は、平成17年10月24日～11月9日まで行った。24日機材搬入、25～31日方眼杭・トレンチ設定・表採、1～4日重機によるトレンチ掘り下げ、1～7日包含層調査・トレンチ内遺構確認・土層断面図等作成および写真撮影、8日機材撤収、8～9日重機による埋め戻しで記録保存の全作業を終了した。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、1表土、2暗褐色土（新期テフラ層）、3暗褐色土、4ソフトローム漸移層、5ソフトローム層、6ハードローム層であり、遺構確認はソフトローム上面で行った。調査の結果、遺構は検出されなかった。遺物は、トレンチ内遺構確認の際に、弥生土器甕の底部片と寛永通宝が出土したが細片であるので図示しない。甕底部片外面には、ミガキが施されており、寛永通宝は新寛永である。

調査のまとめ

今回の調査は、遺跡の範囲内において、台地基部平坦面には遺構が展開しないことが判明した。先行して5地点において調査が行われたことを考慮し、遺跡内に展開している遺構を時代別に概観する。

縄文土器は、まとまった量の出土ではないが、早期～後期の土器が出土し、長期間にわたる何らかの利用を裏づける出土であった。e地点の中・後期土坑群は、縄文時代遺構の検出として初出であり、台地中央から東側に同時期の住居跡等の遺構が広がる可能性が想定できる。

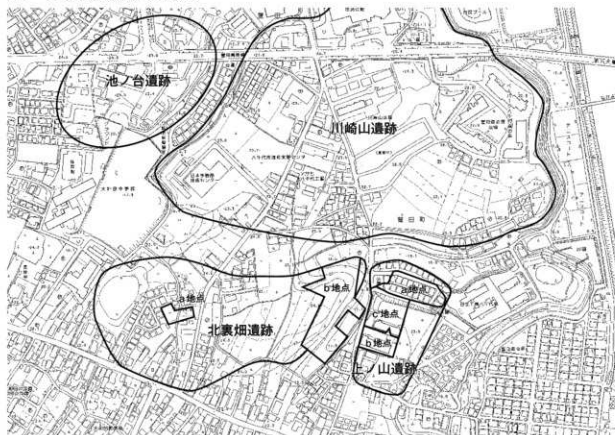
弥生時代においては、北側台地先端からやや奥まった平坦面に、中期宮ノ台期の方形周溝墓群が検出され（b地点）、台地基部縁辺の東側と西側に後期住居跡（a・c・d地点）がひろがり、その中間地帯は遺構の分布はみられない（f地点）。このことは遺跡の立地する舌状台地には、まず台地先端に弥生時代中期の遺構が出現し、台地基部縁辺よりの東西部分に弥生時代後期の遺構が展開するc地点の報告を追認する結果となった（註1）。

中近世にかけて逆水遺跡は、a地点の調査結果から土坑19基が検出された。土坑は、15世紀から17世紀前半とされるロームブロックの混ざる埋め戻しの堆積土が確認できる隅丸方形の遺構形態であり、底面から銭貨が出土する墓坑である。出土した人骨の分析からは、男女の性別は不明であるものの、壮年の人物が埋葬されていた結果となり墓域としての性格を帯びることが判明した（註2）。

（註1）八千代市教育委員会 2003『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

（註2）八千代市教育委員会 2003『市内出土人骨分析委託報告書Ⅱ 逆水西遺跡（逆水遺跡a地点）』

2. 北裏畑遺跡b地点



第4図 北裏畑遺跡位置図 (1:6000)

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡は、新川西岸、国道296号線（成田街道）から北に100m離れた、東西約4km、南北約2kmの範囲に広がり、標高およそ24mの台地上平坦面から斜面にかけて位置する。遺跡の東方には弥生時代後期の竪穴住居跡5軒を検出した上ノ山遺跡、谷津を隔てた北方には、弥生・古墳時代を中心とした旧石器～平安時代にわたる複合遺跡である川崎山遺跡が所在する。過去、遺跡範囲内台地平坦部分のa地点の調査が実施され、遺構は確認できないものの近世・近代の陶磁器・瓦が出土している（註1）。b地点は遺跡範囲内東側斜面で谷津が北から入りこむ部分の調査である。調査区の現況は、畑地・山林であった。

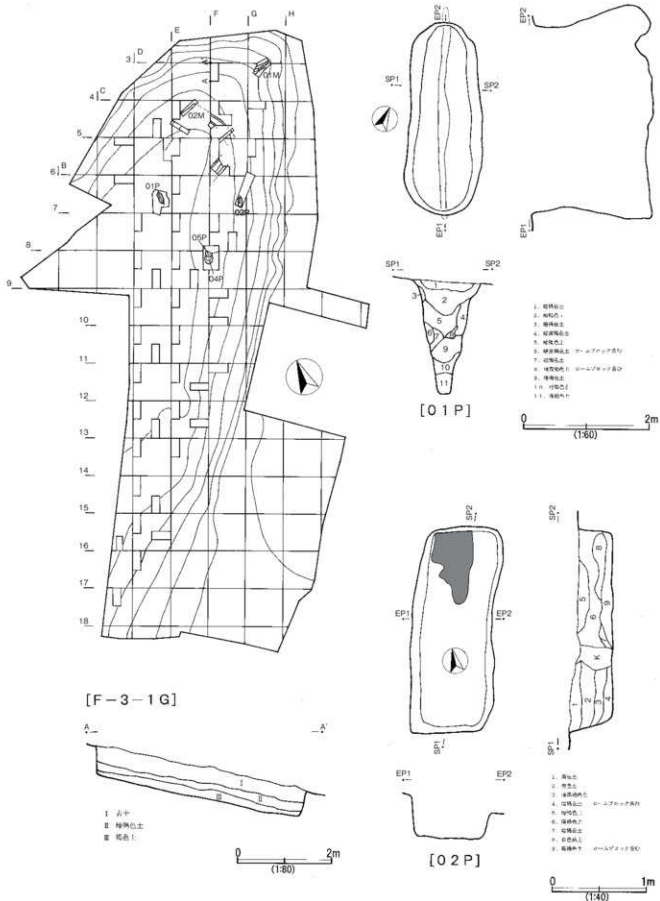
調査の方法と経過

調査は調査区の形状にあわせ北西隅を起点として任意で10m×10mのグリッドを設け、グリッドをもとに2m×4mのトレンチを適宜配置し、必要に応じて拡張等を行った。

調査期間は、平成17年11月2日～同年12月7日である。11月2日に機械搬入等環境整備を行い、7日トレンチ設定終了、10日から重機によるトレンチ掘削・表土除去作業と同時に人力によるトレンチ内精査を実施し包含層調査に着手する。22日～12月5日まで各遺構の実測および記録等を行った。6日機材撤収、7日埋め戻し実施し調査を終了する。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、Ⅰ表土、Ⅱa黒色土、Ⅱb暗褐色土、Ⅲソフトロームが確認でき遺構確認はソフトローム上面で行った。調査の結果、縄文時代陥し穴1基、近世土坑3基、時期不明溝状遺構2条を検出した。03Pについては調査途中で遺構でないことが判明し欠番とした。



第5図 北裏畑遺跡b地点遺構図

[01P] (第5図)

D-6Gより検出した。遺構の形状から陥し穴とする。平面は長楕円形であり、規模は長軸3.1m×短軸1.0m×深さ1.9mを測る。壁は中端でややくびれ、底面はおおむね平坦であるものの長軸方向にオーバーハングする。覆土は、土層断面の観察から上部1、2層は自然堆積であるが、それ以外は人為的堆積である。遺物は出土せず。

[02P] (第5図)

F-6Gより検出した。平面はややいびつな長方形であり、規模は長軸2.2m×短軸0.9m×深さ0.4mを測る。遺物の出土はない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺構北側の部分から0.7m×0.4mの範囲に広がる粘土塊が出土した。厚さは0.1m～0.2mであり、黒色土がやや混ざる。粘土塊である8層は人為的な投棄であり、それ以外の覆土は自然堆積である。粘土塊の出土状況から02Pは、埋まりかけている土坑に粘土を仮置きし、使わなかった分を遺棄したような状況である。遺物は出土せず。

[04P・05P] (第6図)

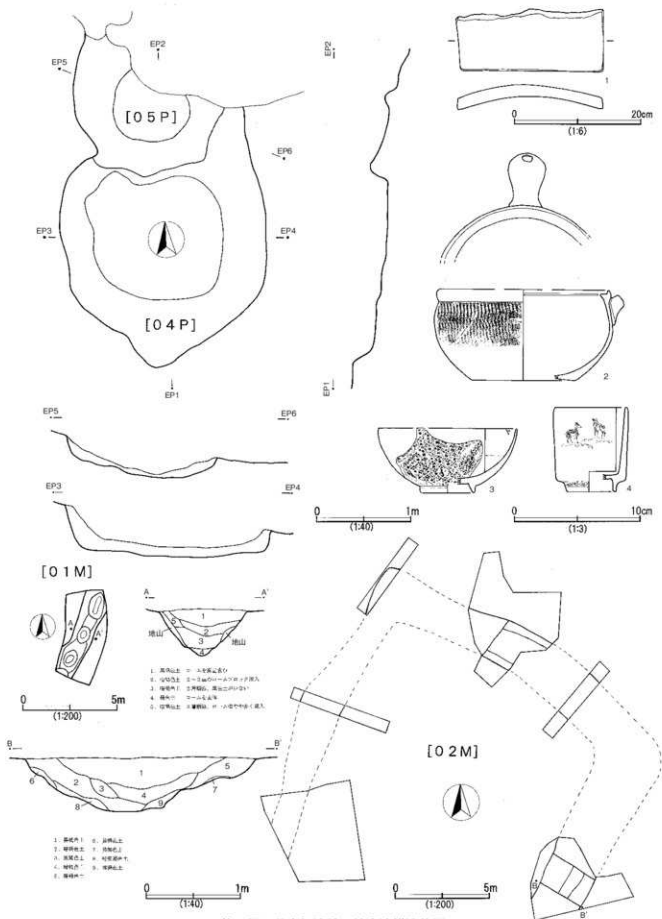
E-8G、F-8Gにかけて検出した。南側04Pは長軸2.1m×短軸2.0m×深さ0.4m、北側05Pは、長軸1.6m×短軸0.8m×深さ0.3mを測る。05Pは擾乱により遺構が一部壊される。覆土には、若干の炭化粒の混入が確認され、遺構底面にはどちらも厚さ0.1mほどの粘土が貼られており、04Pが機能しなくなったあと、それほど時間をおかず05Pを構築している。遺構の性格として近世の炭焼き窯が考えられる。遺物は両遺構の覆土から出土し、遺構が機能しなくなった後にまとめて投棄されていた状況であり、陶磁器・ガラス・瓦・石が天箱2箱分出土した。1. 軒平瓦全体の1/3残存。色調は茶灰色で幅22.0cm、厚さ2.0cm、部分的に銀色の塗料のような痕跡が認められた。04P出土。2. 陶器・急須 全体の2/3残存。復元口径13.8cm、復元底径8.4cm、器高7.3cm、色調は暗茶褐色、胎土は密、焼成は普通である。体部には、細かい網目状の文様が凹凸であらわされている。04P05Pから出土。3. 磁器・湯のみ碗 全体の1/3残存。染付鹿文。体部には鹿文以外に松枝文が、高台部には、唐草文が描かれる。復元口径5.8cm、復元底径3.8cm、器高6.8cm、色調は乳白色、胎土は密、焼成は普通である。04Pから出土。4. 磁器・中碗 全体の1/4残存。外面染付四方摺文、草木文、内面口縁に瓢箪状の呉須絵、底面に花火文が描かれる。復元口径11.2cm、復元底径4.2cm、器高5.2cm、色調は乳白色、胎土は密、焼成は普通である。04P出土。

[01M] (第6図)

G-3Gより検出した。幅1.2m×長さ5.0m×深さ0.6mを測り、調査区域外にもびる。断面は、外に影らむV字に近い形態であり、自然堆積の覆土である。台地平坦面から等高線に直行する溝であり、溝中央底面にはビット列を検出した。近世の区画する溝としての性格が考えられる。

[02M] (第6図)

D-5G、E-4G、F-4G、F-5Gにかけて検出した。幅2.1m×深さ0.5mを測り、調査区域外にもびるが、隣接するグリッドの他のトレンチでは、確認できない。断面は、逆台形に近い形態であり、自然堆積の覆土である。遺構が機能していた時期は、近世と考えられ、平坦部から斜面へかけて傾斜する部分を小さく区画していた可能性が高い。



第6圖 北裏烟遺跡b地点遺構遺物圖

調査のまとめ

今回の調査において、縄文時代陥し穴1基、近世土坑1基、炭焼き窯2基、近世溝状遺構2条を検出した。

縄文時代陥し穴であるO1Pは、谷津がめぐる台地の先端部から単独で検出し、長楕円の平面形態であり、底面は長軸方向にオーバーハングする。これまでに谷津を挟んで隣接する川崎山遺跡では、台地の遺跡範囲内がほぼ調査され、38基の縄文時代陥し穴が存在し、北裏畑遺跡の成果とあわせて分布状況が明らかとなった。遺構の形態から、①平面が長楕円形で底面が狭まる形態 ②平面が短楕円形または不正円形で底面が平坦な形態 ③底面に小ピットを伴う形態の大きく3種類にわけることができる。陥し穴については、川崎山遺跡の陥し穴は遺跡範囲内に満遍なく分布しているが、3～4基がまとまって存在し(註1)、市内の調査事例から形態が時期差を反映する可能性に触れ(註2)、①のタイプは比較的、台地縁辺に長軸方向をむけて成形される点(註3)が指摘されている。北裏畑遺跡のO1Pは、①タイプに分類でき、長軸方向は台地縁辺に直行している。北裏畑遺跡、川崎山遺跡、上ノ山遺跡から陥し穴以外の縄文時代遺構が検出されないことから、陥し穴を利用した人々には、居住空間と狩り場空間とを完全に分離する意識が働いていたことを示しているよう。

O2P、O4P、O5Pは、近世末から近代にかけての炭焼きに関連する遺構である。O4P、O5Pの底面の粘土層は、炭焼きをする際に防湿を目的として貼り付けられ、O2Pの遺棄された粘土は、O4P・O5Pで使用されなかったものと推測できる。市域では、上谷遺跡(註4)、川向遺跡(註5)、大山遺跡などで炭焼き窯が検出されている。平面形態は方形あるいは不正円形で、1.5～2.0m内外の規模を測り、掘り込みはそれほど深くなく、底面は概して平坦である。炭焼き窯はある範囲に等間隔で分布する様相が見られる。「自家消費分」をまかなう小規模な炭焼き窯との指摘がされており、これからの資料の蓄積によりその消費形態は明らかとなるだろう。

遺物は、a地点の出土遺物と同時期のものが出土した。軒平瓦の出土は、瓦葺きの建物が、壊されるか瓦の葺き替えに伴い、使用されなくなったものが投棄された結果と考えられる。遺跡近辺で、瓦を使用していた建物があつた場所として、成田街道の大和田宿を想定できる。成田街道は、もともと佐倉道とよばれ、日光道中千住宿から分かれ、新宿(葛飾区)－八幡－舟橋－大和田－白井－佐倉へ至る道であり、佐倉藩・多古藩が使用する公用の脇街道として整えられた(註7)。江戸時代後期以降、成田山新勝寺へ参詣する人々で大変賑わつたため、成田道、成田街道とよばれるようになる。出土した遺物は、ほとんどが小破片であり、大和田宿から山林へ廃棄された不用品であると考えられる。

(註1) 常松常人 川口貴明 2003『千葉県八千代市川崎山遺跡d地点』八千代市遺跡調査会

(註2) 宮澤久史 朝比奈竹男 2003『千葉県八千代市栗谷遺跡』第2分冊 八千代市遺跡調査会

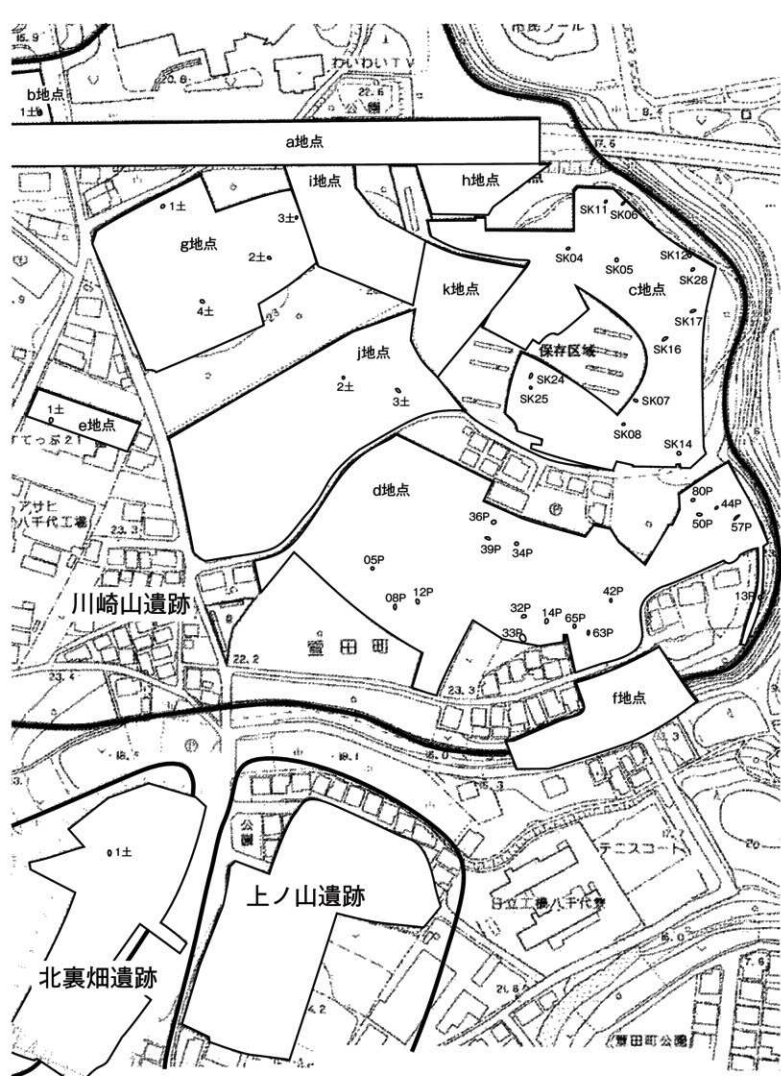
(註3) 小川和博ほか 1999『千葉県八千代市川崎山遺跡』八千代市川崎山遺跡調査会

(註4) 朝比奈竹男 2003『千葉県八千代市上谷遺跡』第2分冊 八千代市遺跡調査会

(註5) 武藤健一ほか 1999『市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会

(註6) 2005『市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会

(註7) 八千代市史編さん委員会 1994『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅱ』



第7図 北裏畑・川崎山・上ノ山遺跡 陥穴分布図 1/2000

3. 高津新田遺跡 c 地点



第8図 高津新田遺跡C地点 (1:6000)

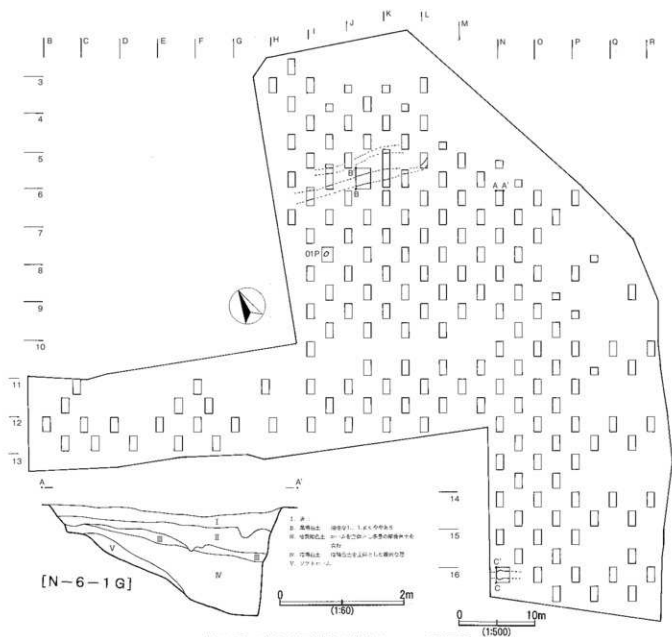
遺跡の立地と概要

高津新田遺跡は、八千代市南西部の千葉市との市境を流れる足太川に西から谷津が入り込む標高18m～24mの台地平坦面から緩斜面に位置し、台地の縁辺に沿う形で遺跡の範囲がひろがる。遺跡の南から西にかけて隣接する高津新田野馬堀遺跡は、千葉市との境をなす道路に沿って江戸時代の野馬土手と野馬堀の遺構が部分的に確認されている。高津新田野馬堀遺跡は、房総三牧の一つである小金下野牧の南東端の区域であり、牧は千葉市側を囲むように作られ、八千代市側は、牧の外側にあたる。野馬土手・野馬堀は、8地点において調査が実施され、「高津新田野馬堀遺跡h地点」に詳細な報告がまとめられている(註1)。

高津新田遺跡は、これまで2地点において調査を実施した。a地点は、c地点の南西に位置し、南に面する緩斜面に縄文時代早期摺糸文期の竪穴住居跡1軒、野馬土手・野馬堀を検出した。a地点、摺糸文期の竪穴住居跡は、八千代市域で最も古い住居跡であり、調査範囲内に同時期の遺構は認められず単独の検出である。b地点は、c地点の南に隣接し野馬土手・野馬堀が確認され、江戸時代以前には、調査範囲内に谷津が存在していたことが、調査の結果から判明した。今回の調査区の現況は畑地であった。

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状にあわせ北西隅に起点として任意で10m×10mのグリッドを設け、グリッドをもとに2m×4mのトレンチを適宜配置し、必要に応じて拡張を行った。調査期間は平成17年11月14日～同年12月28日である。11月14日に機材搬入等環境整備を行い、11月15日～11月21日方眼杭及びトレンチ設定、11月21日～12月7日重機による表土掘削作業、11月22日～11月30日包含層調査、12月1日～12月16日遺構検出作業、12月12日～12月21日遺構実測・撮影等記録作業、12月14日～12月28日重機によるトレンチ埋め戻し、12月28日機材を撤収し、調査を終了する。



第9図 高津新田遺跡C地点トレンチ配置図

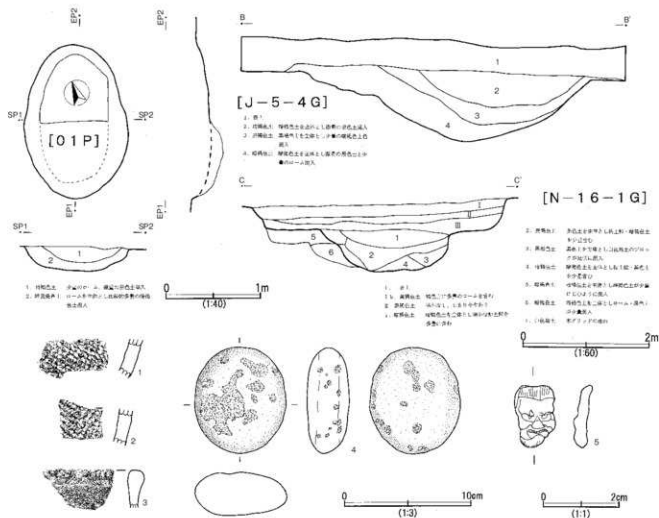
調査概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土、Ⅱ黒褐色土、Ⅲ暗黄褐色土、Ⅳ暗褐色土、Ⅴソフトロームとなっており、遺構検出作業は、ソフトローム上面で行った。調査の結果、遺構として縄文時代土坑1基、溝3条を検出し、遺物は遺構に伴うものはないものの、縄文時代土器、敲石磨石、近世陶磁器小片、泥面子を表採により得られた。

調査範囲東側、N-6-1Gの土層観察から、Ⅳ層暗褐色土は東側に傾斜し東端でソフトローム層を確認できなかった。このことは調査区東側に埋没谷があり、西南から足太川に向かう支谷が、台地を八字状に浸食する地形であることを推測させる。

[O1P] (第10図)

I-7-4Gより単独で検出した。平面は長楕円形であり、規模は長軸1.6m×短軸1.0m×深さ0.2mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は南半分を掘りすぎたがほぼ平坦である。覆土は自然堆積であり、遺物は出土せず。遺構の検出状況などから縄文時代の土坑と判断する。



第10図 高津新田遺跡C地点遺構遺物図

〔01M〕 (第10図)

I-6-1 G、J-5-4 G、L-5-1 Gにかけて検出し、調査区域外にも伸びる。J-5-4 Gでは、幅4.5m×深さ1.0mを測り、逆ハの字状の断面形態で、自然堆積の覆土である。01Mは調査区北側を東西に横断する溝であり、近世の区画溝であろう。01Mに並行するI-5-4 Gで検出した溝も、覆土・形状が01Mに似ており同時期に機能していたことが推定できる。

〔02M〕 (第10図)

N-16-1 Gで検出し、調査区域外にも伸びる。幅2.0m×深さ0.5mを測り、逆台形の断面形態で、覆土は概ね自然堆積である。02Mは調査区南側を東西に横断する溝であり、01M同様、近世の区画する溝としての性格が考えられる。

〔採集遺物〕 (第10図)

包含層調査、遺構検出状況、遺構調査に伴う遺物の出土は見られなかったが、調査開始に先立つ表面採集により得られた遺物を図示する。1. 縄文土器深鉢胴部片である。器面は、外面に複節LR・RLの縄文が施され、内面はヨコナデされている。土器の外面は黒褐色、内面は橙褐色の色調であり、胎土には長石が若干含まれる。2は1と同一個体であり、同様の縄文が施されているものの接合しない。同一個体の土器は、図示した以外にも小破片のものが8個体採集されている。3は、縄文土器深鉢口縁部片である。口唇部は面取りを行い、やや肥厚し刻み目が施される。土器の内外面は、磨滅のために詳

細な観察は出来ず、色調は橙褐色を呈し、良好な焼成である。後期安行1式である。4は敲石磨石である。大きさは、8cm×7cm、重さは230gを測る。砂岩の礫を素材とし比較的平坦な面を利用している。表面は概ね全面にわたりざらついた敲打痕がみられるものの、裏面・側面では部分的にしかない。平坦面から側面にかけて変化する面を使用し、磨っていた痕跡も部分的に観察できた。5は、大きさ3.2cm×2.2cmの妖怪(?)をあらわした型押し成形の芥子面子である。一部欠損し、裏面は窪む。5以外にも芥子面子、泥面子は採集できたが、欠損が著しく摩耗が激しいものばかりであり掲載していない。近世陶磁器は調査区全域において採集されたが小破片が大半であり図示できなかった。

調査のまとめ

今回の調査において、縄文時代土坑1基、近世の溝3条を検出した。

縄文時代の土坑である01Pは、調査区ほぼ中央にあるものの関連する遺構は確認できず、遺構に伴う遺物は出土しなかった為に性格は不明である。表採により得られた胴部片は前期～中期にかけて、口縁部片は後期安行1式に相当する。敲石磨石も、縄文時代の石器として考えた。高津新田遺跡の縄文時代遺構は、a地点において早期の住居が確認され、b地点では表採ながら前期、後期の土器片を採集している。遺跡の立地する足太川と高津川に挟まれた台地を広く見ると、台地東北端に近い部分の大留入遺跡で調査が実施され、前期の陥し穴4基、炉穴1基、土坑1基を検出している。陥し穴の分布状況には規則性は見られず形態も共通しない。前期において遺構を断続的に利用していた状況が垣間見える。台地西北端に近い部分に立地する高津新田遺跡では、前期～晩期に相当する土器が出土し、中期の住居2軒が検出されている。調査面積に比べ遺構の分布は薄く、「立ち寄り」の利用のされかたがわかる(註2)。

以上の断片的な資料からは、長期間にわたり定住し集落を構成した痕跡は本遺跡の立地する台地では希薄であったが、東側台地縁辺部分に陥し穴が存在している可能性は高い。

高津新田遺跡・高津新田野馬堀遺跡は、近世の土器類・陶磁器類・面子類を市域でも突出した分量を採集できる遺跡である。面子類は芥子面子・「破片」面子・泥面子などに分類でき(註3)、芥子面子は人物などの顔を型取り、19世紀前葉から出現する。台東区谷中三崎町遺跡では、裏面に名前と思われる「常」「つね」と墨書された芥子面子が、女子の墓から56点出土し、実際に遊んでいたことがわかる(註4)。では、江戸の子どもが持っていた面子類が、市域において大量に採集される要因はなんだろうか。

江戸時代、下総・武蔵・相模方面の農家で畑や田に散布する肥料は、江戸から排出される面子類などがまざる下肥が主体であるといわれている。面子類は、江戸時代「穴一」とよばれる童子の遊びで使われ、「賭けごと」に類するもの発展し、幕府から「御法度」がでている。「賭けごと」で使われた面子類は、たびたびの禁止令から、大家や町名主が大量に集め処分する必要があった。交通や物資を流通させる江戸の川や堀へ捨てることは固く禁じられていたため、確実に再使用が不可能な場として便所に投棄した。江戸の近郊で多量にみつかる面子類は、厳しい禁令がだされるたびに下肥として集中的に田畑に輸送された結果であると寺島孝一氏は推測している(註5)。「江戸ごみ」特に下肥が郊外にどのような運搬手段で運び出されたかの問題は残るものの、寺島氏の推測の蓋然性は高いと考えられる。

(註1) 常松常人 2007『千葉県八千代市高津新田野馬堀遺跡b地点』八千代市遺跡調査会

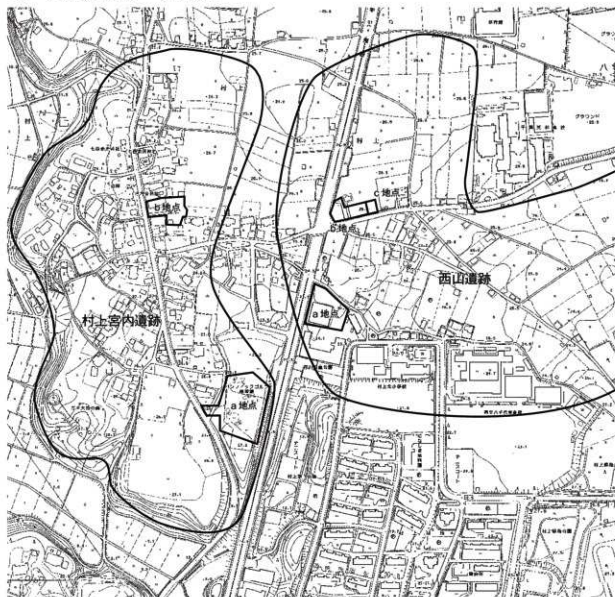
(註2) 朝比奈竹男ほか 1982『千葉県八千代市高津新田遺跡』八千代市教育委員会

(註3) 小俣 悟ほか 2000『谷中三崎町遺跡(正運寺跡)』台東区文化財調査会

(註4) 小島正裕ほか 2004『千代田区外神田4丁目遺跡』第2分冊 東京都埋蔵文化財センター

(註5) 寺島孝一 2005『アスファルトの下の江戸』吉川弘文館

4. 西山遺跡 b・c地点



第11図 西山遺跡位置図 (1:6000)

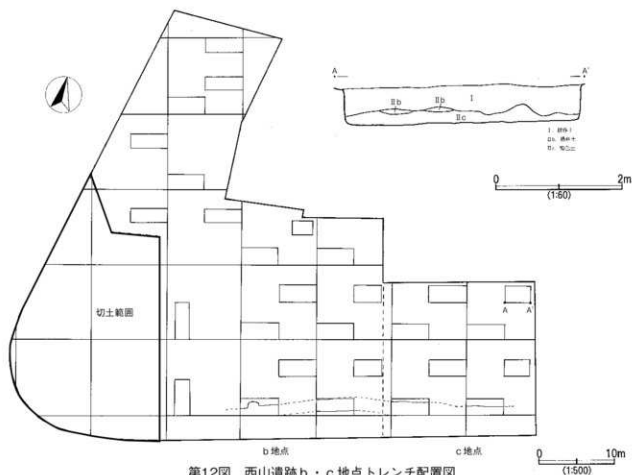
遺跡の立地と概要

西山遺跡は、市中央を北流する新川東岸台地上平坦面に位置する。遺跡は、新川から東へ向い開析される樹枝状の谷津が北へまわり込む最奥部の台地上、標高25～26mの地点に立地している。西山遺跡の南方には、約6万㎡の調査を実施した複合遺跡である村上宮内遺跡が所在している。西方には新川を西にのぞむ村上宮内遺跡がひろがる。村上宮内遺跡では、縄文時代前期・中期・後期、奈良・平安時代土師器・須恵器が出土しており(註1)、古墳時代前期住居跡11軒が確認されている(註2)。

西山遺跡は、これまでにa地点の調査が行われている。a地点は、b、c地点のおよそ150m南側、台地縁辺部に位置し、古墳時代前期竪穴住居跡1軒、平安時代竪穴住居跡2軒と時期不明な竪穴住居跡3軒の存在する調査結果が得られている(註3)。c地点の調査区の現況は、梨畑であった。

調査の方法と経過

調査範囲は開発の契機が、b地点c地点で異なることから地点が分かれることとなったが、隣接した範囲の為、調査は同期間内で実施した。



第12図 西山遺跡b・c地点トレンチ配置図

調査区の形状にあわせ任意で10m×10mのグリッドを設け、グリッドをもとに2m×5mのトレンチを適宜配置した。

調査期間は、平成17年12月7日～同年12月20日である。12月7日～9日に機材搬入等環境整備を行い、12、13日トレンチ設定、15日から重機によるトレンチ掘削・表土除去作業と同時に人力によるトレンチ内精査を実施し包含層調査に着手する。19日～20日まで各遺構の実測および記録等を行い、重機による埋め戻しも完了させ調査を終了する。

調査の概要

調査区の基本層序は、I表土、IIb褐色土、IIc褐色土、IIIソフトロームが確認でき遺構確認はソフトローム上面で行った。調査の結果、遺物の出土はなく、調査区南側で時期不明の溝状遺構を検出した。

調査のまとめ

今回の調査において時期不明溝状遺構を検出したものの、その性格を決めるまでには至らない。各トレンチから遺構が捕捉できない調査結果は、遺跡範囲の中央、台地平坦面に遺構が展開しない可能性を推測させる。村上宮内遺跡・西山遺跡a地点では、古墳時代前期の遺構が検出され集落があることが判明しているが、今回の調査地点まで同時代の遺構の分布は見られなかった。

(註1) 村上宮内遺跡 a 地点にあたる。朝比奈竹男ほか 1987『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書』

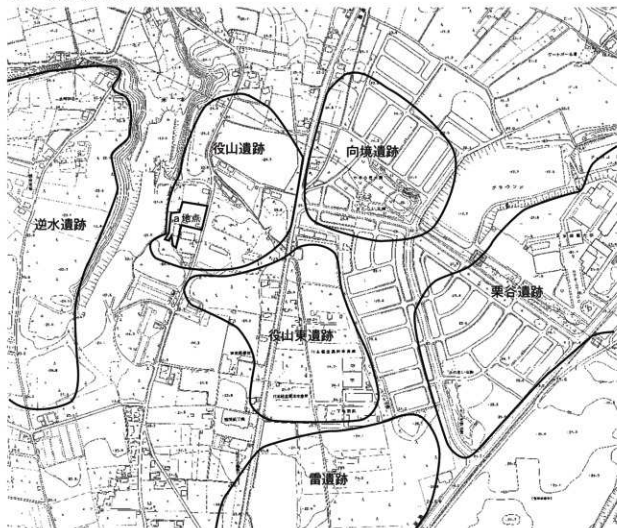
八千代市教育委員会

(註2) 村上宮内遺跡 b 地点にあたる。森 竜哉ほか 2002『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書』

八千代市教育委員会

(註3) 森 竜哉ほか 1989『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告書』八千代市教育委員会

5. 役山遺跡a地点



第13図 役山遺跡位置図 (1:7000)

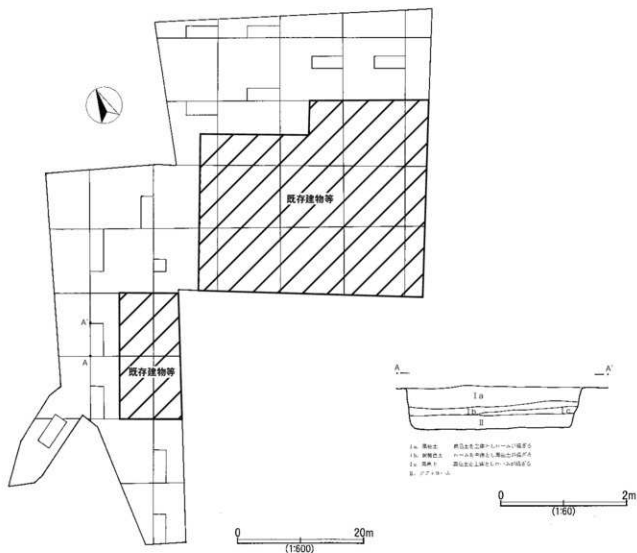
遺跡の立地と概要

役山遺跡は、新川が北流し印旛沼に向かい大きく東に曲がる部分を北にのぞむ台地平坦面上に位置する。遺跡の立地する台地は、樹枝状に開析された谷津により、東西から画され、北に突き出す半島状の地形を形成する。役山遺跡は、半島状の台地付け根の部分に所在し標高約24mの高さを測る。役山遺跡の西方には、谷津を隔てて弥生時代を中心とする逆水遺跡、南東には、縄文時代早期が穴7基、弥生時代後期堅穴住居跡3軒、奈良・平安時代堅穴住居跡1軒、土坑3基などを検出した役山東遺跡(註1)、東には、谷津を隔てて、奈良・平安時代の堅穴住居跡62軒、掘立柱建物跡27棟を中心とし、縄文、弥生、古墳時代の複合遺跡である向境遺跡(註2)が存在する。役山遺跡は今回の調査が初めてであり、調査区の現況は荒蕪地であった。

調査の方法と経過

調査区の形状にあわせ任意で10m×10mのグリッドを設け、グリッドをもとに2m×5mのトレンチを適宜配置した。

調査期間は、平成18年2月1日～同年2月13日である。2月1日～2日に機材搬入等環境整備を行い、3～8日トレンチ設定、3日～12日までトレンチ掘削・表土除去作業と同時に人力によるトレンチ内精査を行う。13日、重機による埋め戻しも完了させ機材を撤収し、調査を終了する。



第14図 役山遺跡 a地点トレンチ配置図

調査の概要

調査区の基本層序は、I a. 黒色土、I b. 黄褐色土、I c. 黒色土、II ソフトロームが確認でき遺構確認はソフトローム上面で行った。調査の結果、遺構は検出されず遺物は出土しなかった。

調査のまとめ

今回、役山遺跡の調査は初めてであったが、遺構遺物ともに確認できなかった。調査範囲内には、既存建物があり、土層の自然堆積が見られないトレンチも多く、調査範囲内は土地の人為的な改変を受けている。

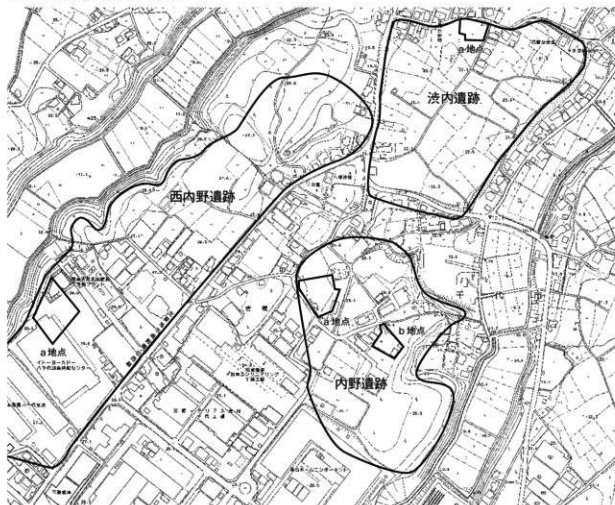
周辺、役山遺跡を考慮すると、役山遺跡の別地点に遺構が分布する可能性はかなり高い。本遺跡が面する東の谷津には、北から向境遺跡、役山遺跡、役山東遺跡が弧状に展開しており、遺跡範囲内の東側にはそれら調査成果が援用できよう。

(註1) 宮澤久史・朝比奈竹男 2004『千葉県八千代市栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡 第3分冊』

八千代市遺跡調査会

(註2) 宮澤久史 2004『千葉県八千代市向境遺跡』八千代市遺跡調査会

6. 内野遺跡b地点



第15図 内野遺跡b地点位置図 (1:6000)

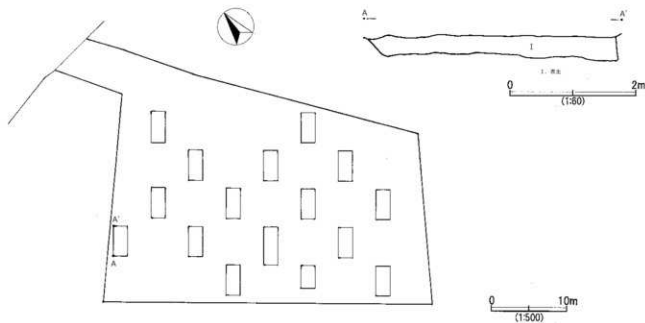
遺跡の立地と概要

内野遺跡は、北に桑納川をのぞむ南北に細長い台地平坦面上に位置する。遺跡の立地する台地は、西側を石神谷津に、東側を花輪谷津に画される。台地は、東流する桑納川まで南北に約2キロの範囲にひろがり、平坦で谷津の発達する深い浸食は見られない。内野遺跡は、台地中央部分に位置し、標高約24mの高さを測る。内野遺跡の北方の浜内遺跡では、占地に3類型が確認された地下式坑11基、溝1条、土坑1基が調査されている(註1)。西方に位置する西内野遺跡では、縄文時代竪穴住居跡2軒、縄文時代土坑8基、時期不明溝などを検出した(註2)。遺跡の南方に位置する内野南遺跡では、縄文時代早・前期炉穴5基、縄文時代陥し穴6基、縄文時代土坑11基、奈良時代竪穴住居跡1軒などを検出している(註3)。

内野遺跡では、これまでにa地点の調査が実施されている。a地点は、遺跡範囲西側の台地中央に近い地点であったが、大半が地形の改変を受けており、部分的にしか地山が捉えられなかった。調査区の現況は荒蕪地であった。

調査の方法と経過

調査区の形状にあわせ任意で10m×10mのグリッドを設け、グリッドをもとに2m×5mのトレンチを適宜配置した。調査期間は、平成18年2月24日～同年3月7日である。2月24日に機材搬入等環境整備を行い、27、28日トレンチ設定、包含層調査、3月2日トレンチ掘削、3月2、3日遺構検出作業、6日、重機による埋め戻し、7日機材を撤収し、調査を終了する。



第16図 内野遺跡b地点トレンチ配置図

調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土、Ⅱソフトロームが確認でき遺構確認はソフトローム上面で行った。切り土をした後、再度盛り土している土層が観察できた。

調査のまとめ

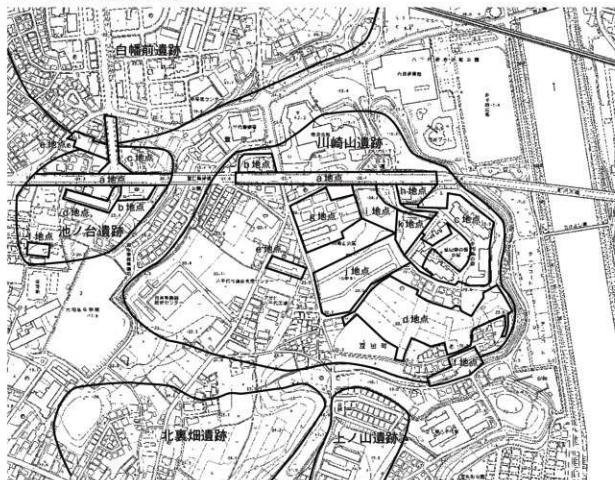
今回の調査では、遺構・遺物ともに確認できなかった。土地の改変を受けており、旧地表面を残す部分は非常に少ない。調査範囲周辺は、斜面を整地して平地を造る地形が観察された。調査地点東側は、崖面を「コの字」状に削平し、平坦面を造成したような地形が見られた。遺跡の立地する台地先端には、中世の吉橋城跡があり、遺跡内の別地点で吉橋城に関わる遺構が存在する可能性も考慮できる。

(註1) 朝比奈竹男・秋山利光 1983「北部遺跡群緊急発掘調査報告」八千代市道跡調査会

(註2) 巖 茂美ほか 1999「市内遺跡発掘調査報告」八千代市教育委員会

(註2) 武藤健一ほか 2004「市内遺跡発掘調査報告」八千代市教育委員会

7. 川崎山遺跡k地点



第17図 川崎山遺跡k地点位置図 (1:6000)

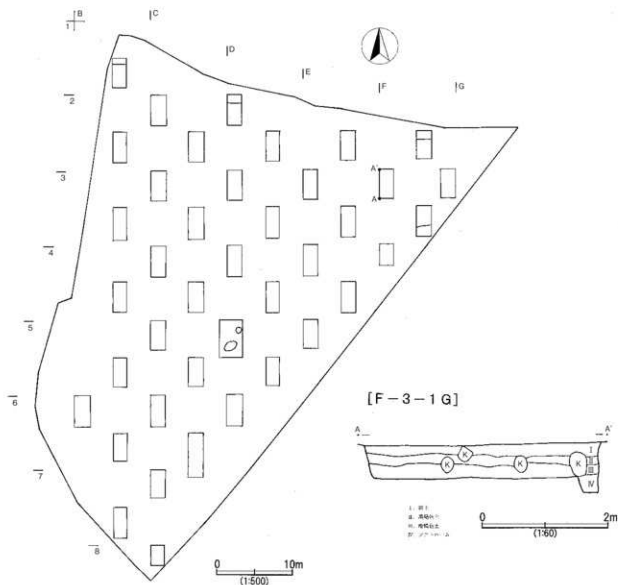
遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、新川を東にのぞみ、北側と南側に谷を画された台地平坦面上に位置する。標高は、約20～30mを測り、新川低地との比高差は約13～16mである。川崎山遺跡の西方には、池の台遺跡が位置し縄文時代の陥し穴4基、奈良・平安時代の堅穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟などを検出した(註1)。川崎山遺跡の南西には、北裏畑遺跡が所在し、縄文時代陥し穴1基、近世・近代の炭焼窯2基などを検出している(註2)。本遺跡南方には上ノ山遺跡が位置し、弥生時代後期の堅穴住居跡5軒を検出した(註3)。

川崎山遺跡では、これまでに10地点において調査が実施され、弥生時代・古墳時代の遺構を中心として分布している様相が明らかとなった。本遺跡北方に展開する萱田遺跡群の当該期と検討可能な資料が蓄積している。

調査の方法と経過

調査区の形状にあわせ任意で10m×10mのグリッドを設け、グリッドをもとに2m×5mのトレンチを適宜配置した。調査期間は、平成18年3月13日～同年3月27日である。3月13日に機材搬入等環境整備を行い、14日トレンチ設定、15日～17日包含層調査、3月16、17日トレンチ掘削、3月17日～22日遺構検出作業、23、24日重機による埋め戻し、27日機材を撤収し、調査を終了する。現状は山林であった。



第18図 川崎山遺跡k地点トレンチ配置図

調査の概要

調査区の基本層序は、I表土、II黒褐色土、III暗褐色土、IVソフトロームに分層でき、遺構確認はソフトローム上面で行った。調査の結果、遺物の出土はなく、調査区中央の縄文時代土坑2基、調査区東側の弥生時代竪穴住居跡1軒、調査区北側の溝状遺構1条が確認できた。

調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代土坑2基、弥生時代竪穴住居跡1軒、時期不明溝状遺構1条を確認した。調査区中央において検出された土坑は覆土、遺構確認状況等から縄文時代の所産であると考えられる。調査区東側において確認できた弥生時代竪穴住居跡は、川崎山遺跡c地点との遺構の関連性が看取できる。弥生時代住居跡は調査区東側以外では、捉えられなかった。時期不明の溝状遺構は調査区範囲外まで東西に伸びる形で続いている。

k地点は、確認調査に引き続いて本調査を実施した。本調査範囲については、2006年「川崎山遺跡k地点」の本報告書が刊行されている。詳細は本報告を参照されたい(註4)。

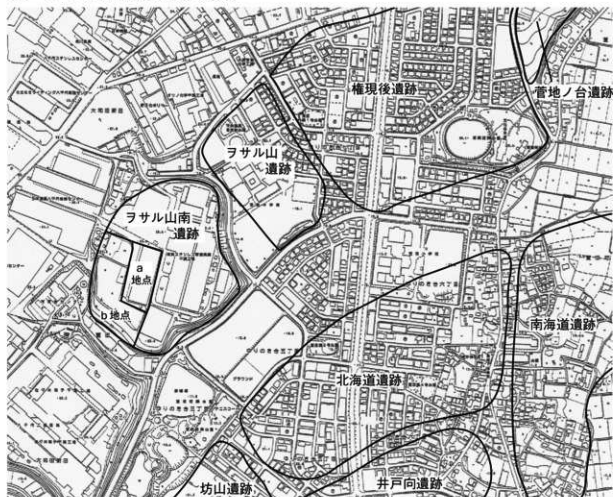
(註1) 2005「市内遺跡発掘調査報告書」八千代市教育委員会

(註2) 本報告書 北裏畑遺跡b地点参照

(註3) 武藤健一ほか 2004「市内遺跡発掘調査報告」八千代市教育委員会

(註4) 伊藤弘一・宮澤久史 2006「川崎山遺跡k地点」八千代市遺跡調査会

8. ヲサル山南遺跡b地点



第19図 ヲサル山南遺跡b地点周辺地形図(1:6000)

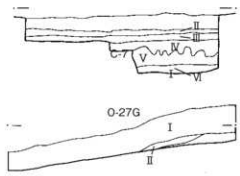
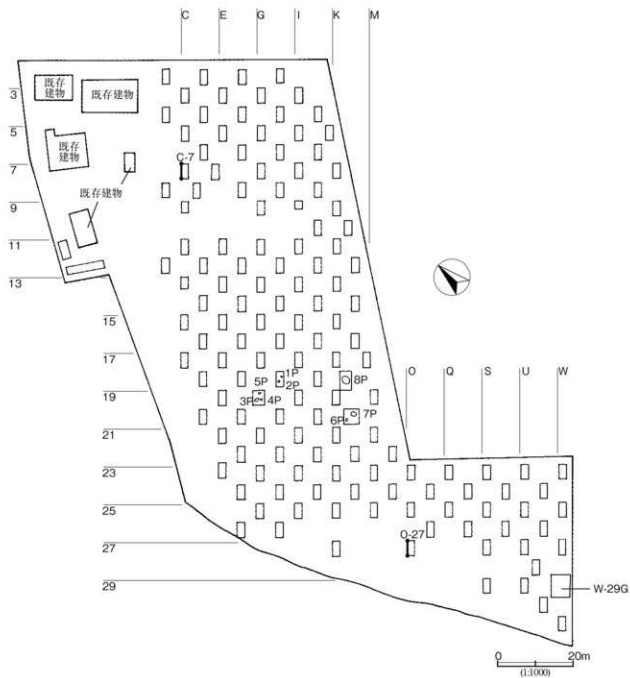
遺跡の立地と概要

ヲサル山南遺跡は、新川から西に入り込む須久茂谷津とその支谷に囲まれた舌状台地先端部から平坦面に位置する。標高は、約20～24mを測り、旧水田面との比高差は約9mである。ヲサル山南遺跡から谷津を隔てた北方には、ヲサル山遺跡が位置し、縄文時代～奈良・平安時代に到る遺構を多数検出している(註1)。

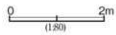
ヲサル山南遺跡では、今回報告のb地点の東側隣接地でa地点の調査を実施しており、縄文時代中期阿玉台式期の竪穴住居跡8軒、土坑7基及び奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒を検出している(註2)。

調査の方法と経過

調査区の形状にあわせ任意で5m×5mグリッドを設け、グリッドをもとに2m×4mのトレンチを適宜配置した。調査期間は、平成18年9月25日～同年10月31日である。9月25日に機材搬入等環境整備を行い、26～28日にトレンチ設定および表面採集を行った。以下、28日～10月5日の間、包含層調査、4日～17日の間、重機による表土除去、6日～18日の間、遺構検出作業、17日～27日の間、遺構調査、23日～31日の間、重機による埋め戻し、31日、全景写真撮影及び機材を撤収し、調査を終了する。現状は山林・畑地であった。



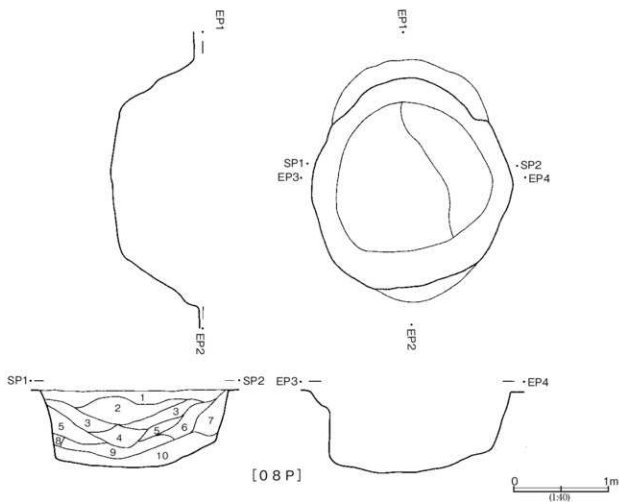
- I 表土
- II 黒褐色土層
- III ソフトローム漸移層
- IV ソフトローム
- V ハードローム層
- VI ハードローム(A T)層



第20図 ヲサル山南遺跡b地点トレンチ配置図

調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土、Ⅱ黒褐色土、Ⅲソフトローム漸移層、Ⅳソフトローム、Ⅴハードローム層に分層できた。調査区の大部分で、表土層の下は、ソフトローム層であった。遺構確認はソフトローム上面で行った。調査の結果、縄文時代の竪穴状遺構1基、時期不明の土坑7基、縄文土器の遺物集中地点1か所を検出した。以下、検出された遺構・遺物を報告する。



- 1 暗褐色土層 暗褐色を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる層。
- 2 黒褐色土層 黒色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる層。
- 3 暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量のロームが斑状に混ざり、微量の黒色土も混ざる層。
- 4 暗黄褐色土層 暗褐色土を主体としながらも多量のロームが斑状に混ざる層。
- 5 暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざる層。
- 6 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも多量のロームと少量の黒色土が混ざる層。
- 7 暗黄褐色土層 ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる層。
- 8 暗黄褐色土層 ロームを主体に微量の暗褐色土が混ざる層。
- 9 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも多量の黒色土と微量のロームが混ざる層。
- 10 黒黄褐色土層 黒色土を主体としながらも多量のロームと少量の暗褐色土層が粗く混ざる層。土器片を一片含む

第21図 ラサル山南遺跡b地点 O8P

[08P] (第21図)

- 位置 K-18Gに位置する。
- 遺構 長軸2.55m×短軸2.1m、深さ0.8mの不正円形の遺構である。しっかりと掘り込まれ、床は、しっかりとしたロームの床で、ほぼ平坦であった。壁も同様にロームの壁でほぼ垂直に立ちあがる。
- 覆土 10層に分層され、10～4層は人為的な埋め戻しが考えられ、その後、3～1層が自然堆積と考えられる。
- 遺物 覆土下層から縄文土器小片が1点のみ出土した。
- 所見 遺構の規模・形態、覆土の観察、出土遺物などから縄文時代の竪穴状遺構と判断した隣接地の調査事例等から中期、阿玉台式期の所産とするのが妥当と思われる。

[01P] (第22図)

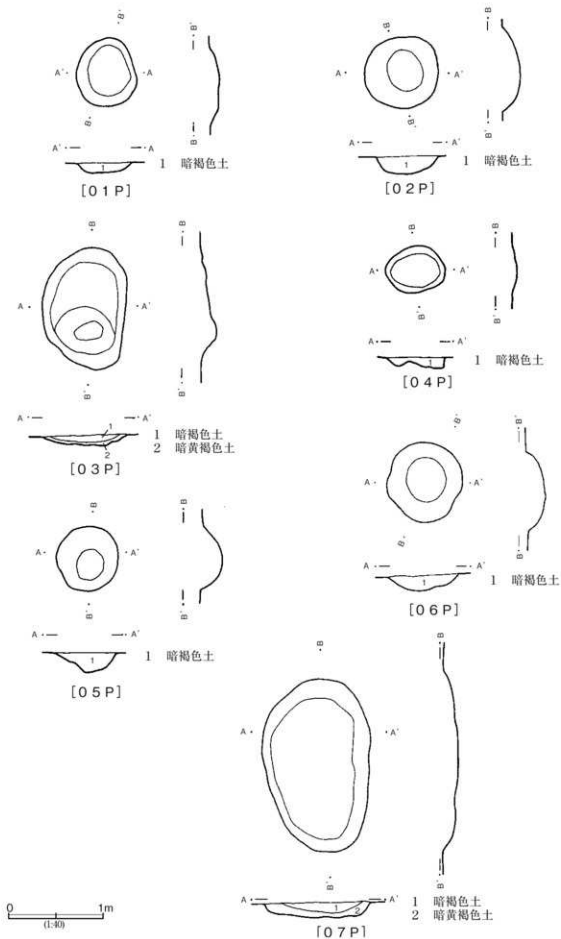
- 位置 H-18Gに位置する。
- 遺構 長軸0.75m×短軸0.6m、深さ0.1mの不正円形で、浅い窪み状の土坑である。坑底は、ロームで、ほぼ平坦。壁も同様にロームの壁でなだらかに立ちあがる。壁も同様にロームの壁でなだらかに立ちあがる。
- 覆土 1層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。

[02P] (第22図)

- 位置 H-18Gに位置する。
- 遺構 長軸0.85m×短軸0.75m、深さ0.2mの不正円形で、浅い窪み状の土坑である。坑底はロームで、ほぼ平坦。壁も同様にロームの壁でなだらかに立ちあがる。
- 覆土 1層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。

[03P] (第22図)

- 位置 G-19Gに位置する。
- 遺構 長軸1.3m×短軸0.9m、深さ0.1mの不正楕円形で、浅い窪み状の土坑である。坑底はロームでほぼ平坦であるが、坑底からさらに1段掘り込みを持つ。壁も同様にロームの壁でほぼ垂直に立ちあがる。
- 覆土 2層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。



第22図 ラサル山南遺跡b地点
01P・02P・03P・04P・05P・06P・07P

[04P] (第22図)

- 位置 G-19Gに位置する。
遺構 長軸0.65m×短軸0.5m、深さ0.1mの不正円形で、浅い窪み状の土坑である。坑底はロームで、ほぼ平坦。壁も同様にロームの壁でなだらかに立ちあがる。
覆土 1層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
遺物 遺物は出土しなかった。
所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。

[05P] (第22図)

- 位置 G-19Gに位置する。
遺構 長軸0.65m×短軸0.65m、深さ0.2mの不正円形の土坑である。比較的しっかりとした堀込を持ち、坑底・壁ともロームで、断面が半球状であった。ほぼ平坦であった。
覆土 1層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
遺物 遺物は出土しなかった。
所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。

[06P] (第22図)

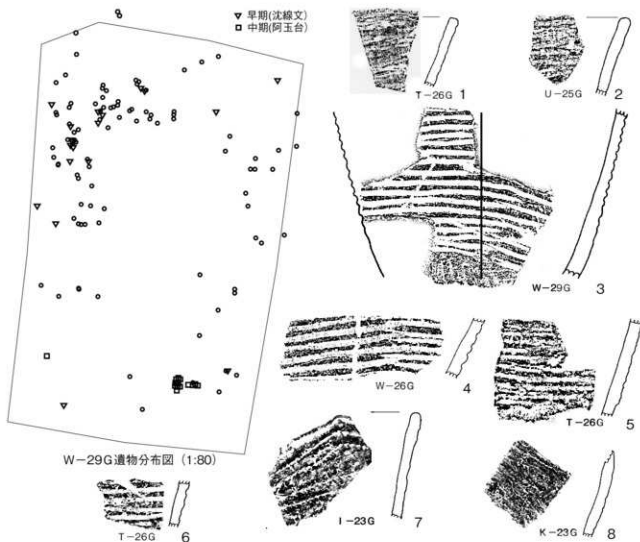
- 位置 K-20Gに位置する。
遺構 長軸0.85m×短軸0.75m、深さ0.15mの不正円形の土坑である。比較的しっかりとした堀込を持ち、坑底・壁ともロームで、断面が半球状であった。
覆土 1層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
遺物 遺物は出土しなかった。
所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。

[07P] (第22図)

- 位置 L-20Gに位置する。
遺構 長軸1.85m×短軸1.1m、深さ0.15mの不正円形の遺構である。浅い窪み状の土坑である。坑底はロームで、ほぼ平坦。壁も同様にロームの壁でなだらかに立ちあがる。
覆土 2層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。
遺物 遺物は出土しなかった。
所見 時期不明の土坑であるが、遺構の規模・形態、覆土の観察などから可能性として縄文時代の土坑とも考えられる。

遺物集中地点及び出土遺物

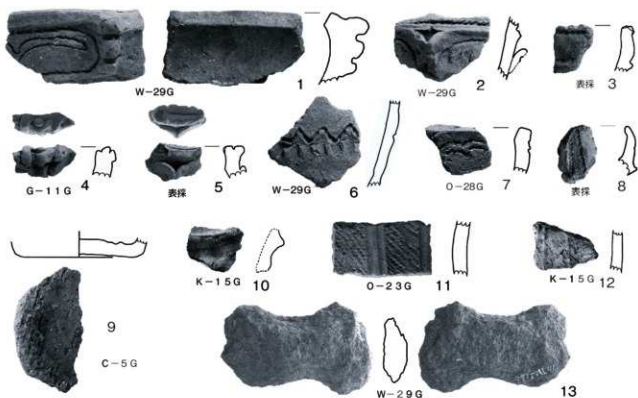
W-29Gを中心に調査区南側の台地先端部から斜面部にかけて、縄文土器が多数出土した。時期的には早期沈線文期、中期阿玉台式期、後期加曾利B式期を中心に出土した。表土層下に残っていた僅かな黒褐色土中に包含されていたものと考えられるが、残念ながら、層的な検出はできなかった。第23図中のドット図で中心が空白になっている理由は、確認トレンチ掘削時に出土遺物をトレンチ一括として取り上げたためである。以下、遺物の記述に移る。なお、詳細は遺物観察表等を適宜、参照されたい。



第23図 ヲサル山南遺跡b地点出土遺物(1)

表2 ヲサル山南b遺物観察表 縄文早期

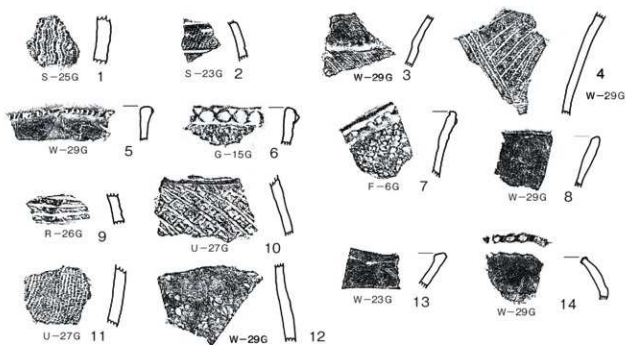
No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	縄文深鉢	口径高底径	-	口縁片 外面 褐色	チャートと思われる小礫を多数含む	普	外面 口縁横方向の順直が基本になり結果としてわずかに凹陥状になっている 内面 無調整	竹之内 ~三戸
2	縄文深鉢	口径高底径	-	口縁片 褐色	チャートと思われる小礫を多数含む	普	口縁部外傾しわずかに外反 口唇角頭 外面 口縁横位の順直 内面 口縁ミガキ	竹之内 ~三戸
3	縄文深鉢	口径高底径	-	胴部片 淡褐色	チャート、石英、長石と思われる小角礫を多く含む	普	外面 胴部中位横方向の太沈線 下半無文で横方向の順直 内面 ミガキ	竹之内 ~三戸
4	縄文深鉢	口径高底径	-	胴部片 淡褐色	チャート、石英、長石と思われる小角礫を多く含む	普	外面 胴部中位横方向の太沈線 内面 ミガキ	竹之内 ~三戸
5	縄文深鉢	口径高底径	-	胴部片 褐色	石英、長石、チャートと思われる小角礫を多く含む	普	外面 胴部中位横方向の浅い沈線(凹線) 内面 無調整	竹之内 ~三戸
6	縄文深鉢	口径高底径	-	-	チャート、長石等と思われる小角礫を多く含む	普	外面 胴部中位横方向の浅い太沈線	竹之内 ~三戸
7	縄文深鉢	口径高底径	-	口縁片 褐色	長石・石英を含む	悪	波状口縁 外面 口縁に添った状態でペン先状工具で連続刺突	明神裏3
8	縄文深鉢	口径高底径	-	胴部片 褐色	長石・石英を含む	悪	波状口縁 外面 口縁に添った状態でペン先状工具で連続刺突	明神裏3



第24図 ワサル山南遺跡b地点出土遺物(2)

表3 ワサル山遺跡b地点遺物観察表 縄文中期

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	褐色	長石・石英・雲母 少量含む	普通	押し引き1列 内面に稜をもつ	阿玉台1b
2	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	橙褐色	長石・石英・雲母 微量含む	普通	押し引き1列	阿玉台1b
3	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	暗褐色	-	普通	押し引き1列	阿玉台1b
4	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	暗褐色	-	普通	-	阿玉台1b
5	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	橙褐色	-	普通	-	阿玉台1b
6	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	胴部片	橙褐色	長石・石英含む	普通	押し引き1列	阿玉台1b
7	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	褐色	長石・石英含む	普通	押し引き2列	阿玉台II
8	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	褐色	-	普通	押し引き2列	阿玉台II
9	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	底部片	褐色	長石・石英含む	普通	新代痕あり	阿玉台
10	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	暗褐色	緻密	普通	-	加曾利E
11	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	胴部片	暗褐色	緻密	普通	LR縄文を沈線で区画	加曾利E2
12	縄文深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	胴部片	淡褐色	緻密	普通	微隆起による区画	加曾利E
13	打製石斧	全長 7.7	-	-	-	-	緑泥片岩 60g	-



第25図 ラサル山南遺跡b地点出土遺物(3)

表4 ラサル山遺跡b地点遺物観察表 縄文後期

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	淡褐色	白色微粒子含む	普通	櫛歯状工具による蛇行沈線文 外面 胴部中位 櫛歯状工具による蛇行沈線文 内面 胴部中位 縦磨き	胴之内
2	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	暗褐色	緻密	良	縄文(単節L R) + 沈線区画 内面 口縁 磨き良好	加曾利B 粗製土器
3	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	砂粒少量含む	良	刺し引き糸線による稜移文 外面 口縁-頸部 無文 頸部 刺し引き糸線文 内面 頸部 ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
4	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	淡褐色	砂粒少量含む	良	刺し引き糸線による稜移文 内面 胴部中位ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
5	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	縦線文に見立てた隆帯による割目文(擬似縦線文) 外面 口縁 ナテ磨き 内面 口縁 ナテ磨き	加曾利B
6	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	縦線文+縄文(複節か?) 内面 口縁 ナテ磨き	加曾利B
7	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	縦線文+縄文(複節L R L) 内面 口縁 1条の沈線 ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
8	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	無文(口縁部無文帯) 外面 口縁 ナテ磨き 内面 口縁 ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
9	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	暗褐色	緻密	良	縄文(節部) + 糸線文 内面 胴部 ナテ	加曾利B
10	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	縄文(複節) + 糸線文 内面 胴部上半 ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
11	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	縄文(節の細いL R) 内面 胴部 ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
12	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	縄文 内面 胴部 ナテ磨き	加曾利B 粗製土器
13	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	暗褐色	緻密	良	無文 内外面ともナテ磨き 内面に稜をもつ	加曾利B
14	縄文 深鉢	口径 器高 底径	- - -	橙褐色	緻密	良	無文 口縁部さきみ 内外面ともナテ磨き	加曾利B

第23図(1~8) 早期沈線文系土器群である。1, 2は、深鉢の口縁片で、1は、口唇部角頭で、無文土器というより擦痕系の土器で横位の擦痕が著しく凹線の様相を呈している。しかも横位の擦痕が著しく凹線の様相を呈している。2は、口唇部角頭味で外反する。1同様、横位の擦痕が著しく凹線の様相を呈している。1, 2とも竹之内式~三戸式にかけての無文土器かと考えられる。3から6にかけては、深鉢胴部片である。褐色の色調で小角礫を多く含む横位の擦痕が認められ、内面はミガキが施されている天矢場・竹之内式の胎土と調整をした土器で、最終的に横位の太沈線を施している。1・2同様、竹之内式~三戸式にかけての沈線文系土器と考えられる。7~8は、深鉢の波状口縁または口縁付近である。色調は暗褐色で小角礫少量を含む胎土である。器面の劣化が著しく文様がはっきり残っていないが、ペン先状の工具で連続刺突した跡が見受けられ、東北地方で見られる明神裏3式と考えられる。

第24図(1~13) 中期の土器群である。1~9は阿玉台式で、1~5が深鉢口縁、6は胴部片で、阿玉台I b式である。7, 8は深鉢口縁で、2列の角押文があり、阿玉台II式である。9は阿玉台式の深鉢底部で網代痕がある。また、本遺跡出土の阿玉台式土器の胎土の特徴として雲母の混入が極めて少ないことが挙げられる。13は打製石斧で、石材は緑泥片岩である。

第25図(1~14) 後期の土器群である。1は堀之内式で、深鉢胴部片である。2~14は加曾利B式で、2~4は深鉢の胴部片で加曾利B 2式の精製土器。5~6は深鉢の口縁片で加曾利B式。7~8, 10~12は口縁片及び深鉢胴部片で加曾利B式の粗製土器と判断した。

調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代の堅穴状遺構1基、時期不明の土坑7基、縄文土器の遺物集中地点1ヶ所を検出した。時期不明の土坑7基は覆土、遺構確認状況等から縄文時代の所産であると考えられる。

今回の調査で注目すべき点は、早期沈線文系土器群が比較的多く出土したことにある。八千代市域の縄文時代早期に関してはこれまで、擦痕文期の遺物、条痕文期の遺構・遺物は比較的蓄積されてきたものの間を埋める沈線文期が比較的低調であった。坊山遺跡等で細沈線系の土器が散見していたが、今回のような、並行する太沈線の土器が他の細沈線文系の土器とは組み合わせず、単純な様相あるいは平行太沈線と無文(擦痕)土器と組み合わせる様相として出土したのは初出である。細沈線系の土器は、その文様構成の分析などから近年かなり編年の研究が進んでいるようであるが、単純な太沈線系の土器については、竹之内式から田戸下層式まで、その編年の帰属が定まっていないようである。今回は、胎土の状況や、器面調整、口唇部の形態などから、竹之内式から三戸式という捉え方をした。が、今後なお検討の余地のある課題と考えている。また、八千代市において東北地方にみられる明神裏3式が出土したことも初出の例で、今後の類例の蓄積を見ながら検討していきたい。

縄文中期阿玉台式期については、阿玉台I b式期を中心に出土した。このことは、八千代市では、標準的な出土様相であった。検出された土坑群に関しては、覆土の状況、隣接のa地点における遺構の展開などから、恐らく、中期阿玉台式期の所産と考えられる。a地点の遺構検出状況及び出土土器から、阿玉台I b式期の集落がヲサル山南遺跡の所在する台地に展開したと考えられる。北側対岸に位置するヲサル山遺跡との比較等をとうして今後も検討を試みたい。

(註1) 阪田正一他1986『八千代市ヲサル山遺跡』財団法人千葉県文化財センター

(註2) 瀬部昭夫他『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』八千代市史編さん委員会

PL1

逆水遺跡f地点(1~4)北裏畑遺跡b地点(5~8)



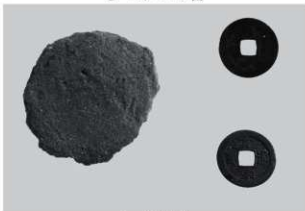
1 調査風景



2 セクション図



3 完掘状況



4 出土遺物



5 調査風景



6 遺構検出状況



7 セクション図



8 01M完掘状況

北裏畑遺跡b地点(1~5)



1 01P完掘状況



2 02P粘土検出状況



3 04・05P完掘状況



4 02M完掘状況



5 出土遺物

PL3

高津新田遺跡c地点(1~7)



1 調査風景



2 遺構検出状況



3 セクション図



4 完掘状況



5 O1P完掘状況



6 O1M完掘状況



7 出土遺物

高津新田遺跡 c 地点 (1) 西山遺跡 b・c 地点 (2~5) 役山遺跡 (6, 7)



1 出土遺物



2 調査風景



3 トレンチ完掘状況



4 セクション



5 完掘状況



6 調査風景



7 トレンチ完掘状況

PL5

内野遺跡b地点(1~4) 川崎山遺跡k地点(5~8)



1 調査風景



2 セクション図



3 トレンチ完掘状況



4 完掘状況



5 調査風景



6 遺構検出状況



7 セクション図



8 完掘状況

ツサル山南遺跡b地点(1~8)



1 調査風景



2 遺構検出状況



3 セクション



4 完掘状況



5 08P完掘状況



6 01P完掘状況



7 02P完掘状況



8 03P完掘状況

PL7

ツサル山南遺跡b地点(1~5、1出土遺物)



1 04P完掘状況



2 05P完掘状況



3 06P完掘状況



4 07P完掘状況



5 W29G遺物出土状況



1

2

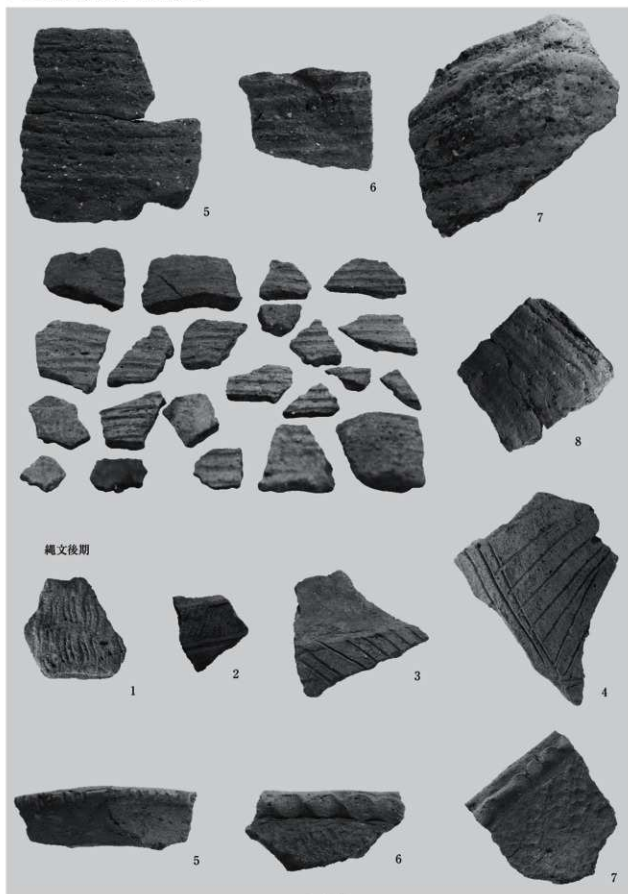


3

4

1 出土遺物

ツサル山南遺跡b地点（2出土遺物）



2 出土遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし さかさみずいせきえふちてん きたうらはたいせきびーちてん たかつしんでいせきしーちてん にしやまいせきびーしーちてん うちのいせきびーちてん やくやまいせき かわさきやまいせきけーちてん をさるやまみなみいせきびーちてん ふとくていせきはつくつちょうさほうこくしょV-
書名	千葉県八千代市 逆水道路f地点 北裏畑道路b地点 高津新田道路c地点 西山道路b c地点 内野道路b地点 役山道路 川崎山道路k地点 ツサル山南道路b地点 -不特定道路発掘調査報告書V-
編集者名	伊藤 弘一、宮澤 久史
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL047-481-0304
発行年月日	西暦2008年(平成20年)2月29日

ふりがな 所収道路名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号					
さかみずいせき ちてん 逆水道路f地点	やちよしよらもとあざさかみで 八千代市米本字逆水 1218-1外	12221	100	35度 44分 27秒	140度 7分 7秒	20051024~ 20051109	248㎡ /1,874.6㎡	宅地造成
きたうらはたいせき ちてん 北裏畑道路b地点	やちよしかわのびらあざきたうら 八千代市栗田町字北裏 865-1外	12221	242	35度 43分 1秒	140度 6分 42秒	20051102~ 20051207	500㎡ /5,250㎡	宅地造成
たかつしんでいせき 高津新田道路 c地点	やちよしやちよとぎい 八千代市八千代台 みなみやうめ 南2丁目5-1外	12221	250	35度 41分 23秒	140度 5分 49秒	20051114~ 20051227	1,436㎡ /2,681㎡	土地区画整理
にしやまいせき ちてん 西山道路b地点	やちよしむらかみあざやちよ 八千代市村上字宮山 752番1外	12221	196	35度 44分 4秒	140度 7分 29秒	20051207~ 20051230	180㎡ /1,838㎡	倉庫及び店舗 建設
にしやまいせき ちてん 西山道路c地点	やちよしむらかみあざやちよ 八千代市村上字宮山 752番3外	12221	196	35度 44分 4秒	140度 7分 29秒	20051210~ 20051230	48㎡ /409.8㎡	倉庫及び店舗 建設
やくやまいせき ちてん 役山道路a地点	やちよしよらもとあざやちよ 八千代市米本字鳥ヶ谷 11253外	12221	97	35度 45分 32秒	140度 7分 27秒	20060201~ 20060213	138㎡ /1,631㎡	工場建設
うちのみせき ちてん 内野道路b地点	やちよしよらもとあざやちよ 八千代市吉橋字内野 1149番5	12221	138	35度 44分 11秒	140度 5分 10秒	20060224~ 20060307	128㎡ /1,179.8㎡	工場建設
かわさきやまいせき ちてん 川崎山道路k地点	やちよしかわのびらあざ 八千代市栗田町字 かわさきやちよ 川崎山742番1外	12221	241	35度 43分 11秒	140度 6分 50秒	20060313~ 20060324	320㎡ /2,339.5㎡	宅地造成
つサル山道路 b地点	やちよしあかわたしんであざ 八千代市大和田新田字 ツサル山587外	12221	172	35度 43分 52秒	140度 7分 29秒	20060925~ 20061030	1,190㎡ /13,300㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
逆水遺跡 f 地点	集落跡	弥生時代	—	弥生土器	
北裏畑遺跡 b 地点	包蔵地	近世	土坑 3基	近世 陶磁器	
高津新田遺跡 c 地点	包蔵地	縄文時代	土坑 1基	縄文土器	
		近世	溝 3条	近世 陶磁器 泥面子	
西山遺跡 b 地点	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	溝 1条	—	
西山遺跡 c 地点	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	溝 1条	—	
役山遺跡 a 地点	包蔵地	縄文時代	—	—	
内野遺跡 b 地点	包蔵地	縄文時代	—	—	
川崎山遺跡 k 地点	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 1軒	—	
		古墳時代			
ワサル山遺跡 b 地点	集落跡	縄文時代	竪穴状遺構 1軒 土坑 7基	縄文土器 (早期・ 中期・後期)	

要約	<p>県費補助金を受け、実施した確認調査を中心とした8遺跡・9地点の発掘調査報告書である。</p> <p>逆水遺跡 f 地点 遺構の検出なし。弥生土器1点、寛永通宝1点が出土。過去、5地点において調査が実施され、縄文時代～中世の遺構・遺物が検出されている。</p> <p>北裏畑遺跡 b 地点 縄文時代陥し穴1基、近世土坑1基、炭焼き窯2基、近世溝状遺構2条を検出し、近世陶磁器などを出土。a地点の調査では、近世・近代の陶磁器・瓦が出土。</p> <p>高津新田遺跡 c 地点 遺構は縄文時代土坑1基、溝3条を検出し、埋没谷が確認でき、遺物は縄文時代土器、石器、近世陶磁器小片、泥面子を得られた。2地点の調査から縄文時代の遺構、遺物と近世の野馬土手・野馬塚を確認できた。</p> <p>西山遺跡 b・c 地点 時期不明溝状遺構を検出し、遺物の出土なし。</p> <p>役山遺跡 a 地点 遺構・遺物の検出なし。</p> <p>内野遺跡 b 地点 遺構・遺物の検出なし。a地点の調査では遺構・遺物なし。</p> <p>川崎山遺跡 k 地点 縄文時代土坑2基、弥生時代住居跡1軒、溝状遺構1条が確認でき、遺物の出土はない。10地点において調査が実施され、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物を多く検出している。</p> <p>ワサル山南遺跡 b 地点 竪穴状遺構1基、土坑7基、縄文時代、早期、中期、後期の土器が出土している。1地点において調査が実施され、縄文時代と奈良・平安時代の遺構を検出している。</p>
----	--

千葉県八千代市

逆水遺跡 北裏畑遺跡 高津新田遺跡 西山遺跡
内野遺跡 役山遺跡 川崎山遺跡 ヲサル山南遺跡

— 不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ —

2008 (平成20年)

印刷日 2008年 3月12日

発行日 2008年 3月14日

編集 八千代市教育委員会

〒276-0045 八千代市大和田138-2

TEL 047-481-0304

発行 八千代市教育委員会